

無政府主義の組織と行動に関する一般概念（鈴木靖之）

はしがき

「無政府主義には組織がないから駄目だ」とか、「行動に対するプランがないから何も出来はしない」と言う者がある。世にこの位馬鹿化た批難はない。何故なら無政府主義には立派に自由聯合の組織がある。自主行動のプランがある。彼等はこれを知らずして批難しているのだ。

だが吾々は嘗てこれ等の批難に対して「勿論！我々は無組織、無計劃である」と言い、「無組織の組織、無計劃の計劃である。」と答えた、然しこれは今日誤られ勝ちである。我々のかかる言葉は謂ゆる組織（人為的、法律的）と、行動（政治的指令的）に対して無政府主義の自然発生的な××への目的意識の下に起り来る組織（自然的、自由聯合的）と行動（自主的、自治的）とを内容として主張したものである。

だが我々は今日此の組織と行動とについて明確に提示すべきときである。そして今、これについて語ることは甚だ危険であるとは言え、少なくともこの運動（無政府主義）を理解し、これを行動せんとする者にとつては是非共これを研究し、理解し、確信を得ることは緊急且つ必要なことであると思ふ。

一 自由と非自由

今日、世人の自由に対する見解は甚だしく混乱している。今その傾向について之をみれば、個人的自由、或は社会的自由と極端に相反する方向に發展し、仍つてその自由獲得の方法も自ら異っている。

今個人的自由は、その余りにも主観的立場を固守するの余り、忽ち利己の囚となり、常に血で血を洗う現状を招来している。又社会的自由はその客観性の故に（ボルの称う大衆的云々等々）個人の自由を蹂躪して社会（国家）の奴隷を承認する。我々は前者を資本主義国家日本に、後者を社会主義国家ソビエトロシアに見る。だが此等の自由は余りにも皮相である。それは独裁階級の法律的に許されたる自由以外の何者でもない。それは階級の自由と呼ぶことが出来る。今ブルジョア自由と言ひ、プロレタリア自由と云うも階級的自由と呼びことが出来る。今ブルジョア自由と言ひ、プロレタリア自由と云うも階級的独断の上に自己陶醉の夢を貪っているお目度に過ぎないものである。

我々は我々の自由を社会的個人的自由に求める。それは今両極端の主張の折衷に非らずしてそれ自体の本質的主張である。それはアナキの社会意識に於てのみ可能である。然り真の自由は階級的社会的自由でなくてアナキの社会的自由の外ないのである。

今此の主張については何人も承認するであらう。レーニンに於てさえその「国家と革命」に於て「吾々は終局の目的としては国家の廃止についてアナキストに少しも不同意ではない」と言う、だが彼は曰う「デモクラシー（プロレタリア独裁）は死滅する。国家なる独特の強権装置により（圧迫と征服と蹂躪により）果しない永い年月を費して国家の主張する社会的法則の服従に「人々が遂に（諦めて）習慣づけられた時にのみ」——括弧は筆者——と、更らにエンゲルスは「その時国家は自ら眠り込む」と云う。何たる空想だらう。だが斯る自由とは如何なるものであるか、彼等に依れば、それがアナキの自由であるとしても信ずるであらう、がそれは全然夢である。国家強権と、アナキの自由とは全然反対である。

然らば「人々が遂に習慣づけられ」自由を求むる心がマヒし「国家が自ら眠り込む」とは如何なる社会状態であるが、そこでは人類は全然化石化している。それは完全に非自由である。

然るに我々は「各人の自由は万人の平等に於てのみ実現され得る。権利上、実質上の平等に於ての自由の実現は正義である。」パクーニンを以つてすれば、社会的個人的自由の基底は全く社会的正義に於てのみ実現され得るものであることを知るであらう。我々は今此の社会的自由を如何にして実現するか。

二 政治行動か自主行動か

「一切の階級闘争は政治闘争である。何故ならば、雇主に對する労働者のストライキも、土地を欲する農民の闘争も国家権力によって弾圧されている。それ故に全労働者の闘争は政治的性質をもつものであり、労働者運動を革命的闘争に結合せねばならず、労働者農民を抑圧するブルジョア革命に對する闘争は、究極に於て権力奪取の闘争である。」これマルクス派の自由獲得への主張である、これ政治的行動の主張である。然るに、

「既に政治家は、例えそれが革命的政治家であっても全くそれは野望を以つて身を武装した馬賊の徒である、彼等の騒動（政治行動）は正に支那戦争に相似たる仕打ちである。南閩と北閩との飽くことなき闘争、それは支那民衆と何んの係りがあるか。支那民衆にとつて馬賊は一つの恐怖である。

「然し支那民衆は自ら起つて之と戦ひ、これを逆襲する。然り吾々は今、我々の馬賊を追払わなくてはならぬ、馬賊を逆襲し打ち滅ぼさなくてはならぬ。だがそれは馬賊の如くしてではない、馬賊的集団、それは遂に馬賊となり独裁を招来する。斯くてそれは只政治的権力奪取戦以外の何物でもない

「敵の集団的戦闘力（政治行動）に對する集団的徒然的態度を以つてするの愚を止めよ、吾々が勝たんがためには吾々一流の散兵戦で闘ふバルチザンの威力を以つてすることだ。今英領ビルマに於ける××事実は農民のその態度は日中田畔を耕しつゝ分散的な自主行動によつて敵を逆襲しつゝ止に勝利の道を急行しつゝある。」

これ吾々の自由獲得への主張である。茲に労働者農民の闘争を弾圧する国家権力に対して新しき国家権力を要求する政治行動か、それとも国家権力の弾圧をハネ反して起つて完全の自由解放を要求する自主行動か、道は二つに分れる。一方は強権の原理の上を行き、一方は自由の原理の上を行く。

茲に於て吾々は曰ふ。

「一切の政治行動は権力争奪戦以外の何ものでもない」として権力、それはブルジョアでもプロレタリアでも所詮権力は権力である、それは明々白々強権の原理の上にある。それは絶対に自由に通ずることは出来ない。

吾々の自主行動は自由の原理の上をアナキーへの直接道を指して行く、「自分の解放は自分自らの手で」をモットーとして闘い進む、そこのみ自由への道は開ける。然り自由は他によって与えられるものではなくして、自ら獲得するものである。自主行動、それは今解放の唯一の道である、その確実な歩調である。

三 結成組織か、分散組織か

「由来組織と云うものは唯だ団結と連帯の思想の現実的実行たるのみならず、一般に云つて社会生活に関する当然且つ必須の予想である。一般人類の集合社会に於て、又個々人間群に於て、将来到達せらるべき共通の目的がある限り、組織は万人自身に迫る必須事である。」——マラテスタ。

今、組織は万人自身に迫る必須事である、からと云つて吾々は必ず結成的組織を持たねばならぬ理由は何処にもない。寧ろ「組織を造ると云うことは直ちに指導に身を托してあらゆる自由創造の力を萎縮せしめて了うような、あの強権的中央集権的組織に入るといふ意味を強からしめる」(マラテスタ)。事実、吾々が組織と呼ぶときには恐らくその結成主義に拠るもののみを指して考へる。然しそれは大間違ひである。そして今結成主義の組織は、それは全く革命的活動団体に於ては最も不適当なばかりでなしに、吾々の革命の目的を遂行するためには実行不可能なものである。

然し纏つて一方強権的中央集権主義の下に於ては権力行使を前提として全く結成的組織を必要とするであろう。けれどもその結成的政治行動は革命的活動体となるとき必ず事前に失敗する、その理由は幾多あろうが就中それは、彼等の機械的結合に拠るものであることは言を待たない。曰くフランス革命のコンミュン一揆に於けるバベーフ一派の失敗、近くは日本に於ける共産党一派の失敗。失敗は今や結成主義の歴史であると云つても過言ではない。

然るにロシア革命は如何、と云う者がある。それは余りにも皮相である。ロシア革命は結成主義の賜ではなくして各地各所に勃発せるバルチザンの一揆暴動の湧起に起因するもので、それは決して結成組織のためでなく寧ろ分散的であつたからなのである。然れば吾々は各地に於けるバルチザンの威力を窺ひ得ば思い半ばに過ぎるものがある、(それは後日に譲る。マフノ農民運動参照)

然るに「完全な白紙と完全な自主かまたその結果として個人的及び群団の完全な責任と共同の仕事を行なうために一旦取結ばれた契約に対しては道徳的義務を強調するためにまた認容せられた予定計画と相容れないことはこれを企劃せぬようにするために団結を有用なりと信する者同志の自由合意とが、即ちこの基底である。この基底の上に立つてのみその組織に活動を与えるところの實際的型体と適当な機関とを生み出し、ここに群団、群団の聯合会、聯合会の聯合、聯盟、大会、委員会が出来て、通信その他の機能を委託せられることになるのである。併し、個人の思想と創造力とを妨げずひたすら単独でなければ実行不可能な、若しくは不可能に近い行動を尊重するためには、これ等のことはすべて自由に為されなければならない」——マラテスタ、

此処に分散組織がある。此の基底に於てのみ革命的活動団体の眞の結合と行動とが為されるであろう。

然らば吾々の分散的組織は如何にして始められるか。

四 分散的組織の方法について

各人は各所で、直接に交渉する。吾々がアナキスト行動を企劃し、宣伝し、実行に着手する時、然も誰の手、(仲介者の手数)も煩さず一切自分の手で始める、それは幾多の困難と不安とに駆られるであろう、そしてそれは余りに時間を費すに違ひない。だが自分の考えを人に托さないことを自信すべきである。我は友の一人に話かけ、その友はまた他の友に話しかける。斯くして我等の数は増えて行く。然ればAはAでBはBで各自は各自の行動を押し進める、而して各自の仕事は益々我等を親密にし、必要は我々交渉づける。然ればやがて一朝の機に会しては以心伝心の中に結合し、或時AとBとが一事業に共鳴し、或はBとCとがその仕事の実行のために結合する、それは全く潜在的でさえある、何人も、或は同志間に於てさても彼等の事業を知得することは出来ない。それ故に吾々の事業が何等他の故障なしに、自由に活潑に進展して行くであらう。

然るに吾々は、アナキスト運動が今、全般的に何を要求しているか、自ら直覚し、独創し、主張する、と同時にその要求を満足するために最も緊急なる事から実行を急ぐに至るであろう。それは常に自由と創造とに力点を求めるアナキスト行動の必要欠くべからざる事柄である。

此の時一切の必要は彼と彼とが要件を満足すべく直接に交渉する。最も敏捷に、最も秘密に、大胆に事業は続行されるであろう。然れば一事業に携わつた者のみが絶対にその事業を理解し責任を負うことは勿論、他に対しても専らその道徳的義務を果すために心がける。仍つて犠牲の問題も、至極軽少の範囲に於いて解決され、他すべての各事業は依然として進行することが出来るであろう。

各人は各所で、直接に交渉する。

五 自主的行動の着手について

各人は各人の意見で、各人の全能力を傾けて活動する。

これは云うまでもなく個人的である。だが吾々の能力は自然発生的に、創造的に実行するときは、最も活潑に、そして完全な結果を得ることが出来るものである。人は誰でも自発的に行動するとき最も愉快である。而も益々能率が上る、更には凡ゆる不都合や障害に對しても充分にこれを補い、或は排除することが出来る、ここに最も適切な方法と敏捷さと、成功に對する確信とを以てて事業に當ることが出来るならば、吾々は何ぞ他の手段を探し求める必要があるらう、勿論人頼りなぞする必要はない、茲に自主行動の原理がある。

凡ゆる發明見は皆この自主行動の態度に於てのみその成果を得た典型的な証拠ではないか。
吾々は各人の意見で、その全能力に依じて活動するとき、一切の事業に對する苦難や故障に對しても皆その個性の天分と経験とに拠って巧く切り抜けて行くことが出来ることを信ずる。當に茲にのみ成功の鍵がある。吾々は彼の能力を彼の天分の中に発見する。それは各個人の意見で活動するが故に、これを運動に求むれば彼がアナキストとしての勢一杯の努力を期待するに充分であろう。吾々は知っている。彼は彼の能力の方向に凡ゆる努力を払うに違いない。更らに彼が彼の最も可能と自信する方向に驕足を延して行く、彼は自らの力の不足を感付いたとき、その力の欠を補うBかCかDに手を求める。そして事業は活発に進展して行く。彼は自由労働者である。彼はその労働について種々経験を持っている。そして相手の能力や意欲や感情や性質、さては習慣までもよく知っている。今や彼は自らその人々とこれから何を始めようかも知って、今は只だ決心は機会を待つばかりである。

六 分散に拠る協盟

各人が各地所で同志的に結合する。

各同一地方に在る彼と我とが、一事業を仲介として、或は情義的に一層彼等を同志的結合に導く。彼と我とが一つの実行に着手し、或る場合は個々別々に、或る時は一致協力してそしてその協力と協力が遂に彼等の團結を要求することになる。此處に分散に拠る協盟の端緒がある。然るに吾々にとつて最も重大なことは此の協盟に於てである。日頃よき同志もこの協盟については躊躇し、或は退却する。然らば速かに止めるがいい。然し協盟は吾々の事業の進歩と共に益々堅き團結を要求する。事業が始まれば最早や苦情は何んの理由とならないであろう。で吾々はその当初に於てお互の意見や能力や人格を理想的に受け入れることは絶対に禁物であるが、よくその親密の度は吾々を理解せしめ、仍つて百の理窟を一掃し、先づ何よりも実行、例えそれが微々たるものからでも始まるならば決してアナキスト運動は吾々を躊躇せしめない、否寧ろ團結の力は強く吾々を一層大胆にするであろう。茲に肝心なことは如何なる事業と雖も冷静なる批判と確かな理解とを以てて當ることである、若し一歩誤ればその瞬間、お互は悲運のドン底に泣かなくてはならぬのだ。

だが協盟は多くの場合知らず知らずの中に堅く実行されているもので、寧ろその方が本質的である。そして遂に意識的に團結するに至る。

吾々の各人が各所で直接結合するとき、これは協盟の一単位となる。更らに結合は復合的に一致團結するとき、分散に拠る協盟と呼ぶ、而してこれを結成とは呼ばない。何故ならそれは量的結合でなくして絶対に質的結合だからである。

然れば少数な人々が各所で、同志的結合の中に各同志達と結び合う。これ即ち協盟である。

その地的分布こそ分散的協盟と呼称すべきである。

七 協盟に拠る聯合

各人各所で、一から多へ。

各遠隔地に在る各人と各人とは如何にして聯合するか、即ち或る一事業、或は全事業を仲介として聯絡する、これ吾々の行動となる唯一の条件である。例えば一紙片の散布及びその伝達とか、或は同盟争議に對する圧迫とか、サッコ、ヴァンゼツチ解放時に於ける聯絡とかの場合の如く一地方から全地方に、そして全世界に聯合するであろう。

然るにそのためには如何なる条件を満たすべきか、「口から耳へ」、そして敏捷なる通信が飛ぶであろう、がそれよりも何よりも、吾々によって唯一の力となるものは、吾々の創造的直感と、自由意志に拠る自由行動これである。

吾々は未だ何者によって吾々の事業について支配者命令も受けはしなかつた。それ故に如何なる場合に於ても吾々の事業は吾々の自由細胞的活動に拠つたものである、直ちに吾々の行動は何等の故障なしに遂進して行く。これ吾々の自主行動が凡ゆる政治行動を排除して敏捷に間断なくその成果を挙げ得る唯一の特徴である。吾々の聯合は「次から次へ」「一から多へ」伝達される。

八、自由聯合の実際について

我々の協盟に拠る聯合の実際は、取りもなおさず自由聯合の実際である。それは協盟体の自由な聯合で、恰も網の目の如く、地上を張りつめるであろう。網の結び目は即ち協盟の士に依つて堅められ、如何なるものとも雖も地上を匍うものはこの網の目に触れざるを得ぬであろう。触れば以心伝心に網は振動する。

註(自由聯合組織についてバクーニンの「下から上へ」「四周から中心へ」は明らかに誤謬である。それは結成的組織を建築し、政治行動の組織体となり、自由ソビエト組織に外ならない。クロボトキンの網状組織は遂に分散的組織を要求してのみ始めてコンミュンの組織を実現し得るものである)。

然るに一度網系に触れば、結び目は振動し、バルチザンの威力は湧起し、台風の如き渦巻が始まるであろう。屯田兵は何時、如何なる處から発砲するか、それは今知る由もない。

結 び

今や、人々は永き苦勞と暗闇との現実生活から、自由への解放を發心し、その正義を求むる心を以て自ら何らかの方法に依つて生活の理想を実現せんと計る。この時多くの人々は政治へ、そして政治行動に幻惑されて行く、そして幾度かの失敗は遂に政治に失望し落胆する。心ある人々はその苦き經驗と苦勞から政治の到底頼るべからざるを悟るであらう。そして自ら自力によつて起たんと決心する。この決心こそ纏て吾々の自主行動の端緒ともなり發展となる手がかりである。此處に自由聯合がある。自由意志の創意的發心から自由合意へ、そして遂に自由聯合へ、この聯合の實際に依つてのみ、吾々は吾々の奴隸制度から解放を期す事が出来るであらう。

上來アナキスト運動の組織と行動の一般概念は分散的組織と自主行動を論ずることによつてこの稿を終る。然し分散と言ひ、自主と言ふも、それは全く一の型態的理論に終らなければならぬ。併し實際は分散組織の中に聯合があるように自主行動の中に直接行動の含まれることは言うまでもない。で今吾々は革命運動にこれを求むれば「結成組織即政治行動」と「分散組織即自主行動」とこの二つの方法以外に運動には發展の道を失う。此處に吾々アナキストは後者を、徹頭徹尾これを強行する者である。然ればこの理論と實際とは常に嚴重に実践されなければ価値なきものである。運動の實際は「口から耳へ」為されなければならぬ。なおロシア革命に於ける自主行動は「マフノの農民運動」を読まれんことを望む。更らに組織に関してはマラテスタ「無政府主義組織論」(農村青年社)「如何に為すべきか」(パンと自由社)「自主行動論」等是非参照されんことを。最後に「独裁論否定」をやる筈だったがそれは残念乍ら後に譲らなければならぬ。(完)